

1936年の高倉観崖

岡村暢哉

はじめに

高倉観崖（1884年・明治17年生まれ、1957年・昭和32年没）は現大分県大分市出身の日本画家。京都市立美術工芸学校卒業後、医師、実業家の中馬興丸の支援を受けるなどして、1914（大正3）年、31歳の時第8回文部省美術展覧会（文展）で《鴨川の春》が初入選・褒状となり、以後第9回、10回、12回の文展にも入選した。1920年以降は帝展への出品をやめて官展に距離を置き、国内各地を訪ね滞在、画会を開き、また個展を開催する等して制作を続けた。また、俳句にも力を注ぎ、俳人としての活動も知られている。

観崖については、以前、印の使用傾向等について考察したところであり¹、本稿では観崖の73年にわたる生涯の中で、現在その動向が最もよく把握でき、また絵画制作にあっても充実作を多く遺した年の一つ、満52歳に当たる1936（昭和11）年を中心に活動状況を検証し、その画業の一端をたどることとしたい。

1. 1936年1月から2月—帝展への出品を試みる—

1936（昭和11）年、観崖52歳。観崖は同年、大分新聞に「旅の折節」という随筆を不定期に連載しており、まずは、主にその記述によって観崖の動向を追ってみる。

1月、大分に帰郷。ここで、観崖は1920年以降、15年以上にわたって出品をやめていた官展へ出品をめざす。これまで、橋本関雪との意見の違いにより²、官展を離れ、一貫して在野にあつて制作を続けてきたとみられていたが、一度は、帝展への出品を試みていたのである。

美術界では、帝国美術院および帝展の改組に関して騒動が続いていた。当時、帝展の鑑査展では画一的な作風が個性を追いやり、特選も各画塾間あるいは子弟関係における割振りの観を呈しており、また、無鑑査出品にあつても安易で画一的な「帝展調」作品が目立つようになった。こうした状況は、帝展のみならず院展や二科展にも見られたという³。このような状況を打破すべく、当時、文部大臣松田源治（大分県出身）は日本画家横山大観、洋画家和田英作らと調整のうえ、1935年5月新たな帝国美術院官制を閣議決定、新美術院会員が発表され、第1回改組帝展開催に向けて動き出した。いわゆる「松田改組」である。ところがこの改組に当たっては、ごく少数の画家にしか相談しなかつたうえ、従来の無鑑査作家が大幅に減らされたこともあり、美術家、美術団体が改組帝展に参加するか否かで大きな議論が巻き起こった。この影響で、例年秋11月頃に開催される予定は、翌年にずれ込み、年度末近い2月25日から3月25日の開催となった。また、開催は第一部（日本画）、第三部（彫塑）、第四部（美術工芸）のみとなり、第二部（西洋画）は実施されなかつた。

¹ 岡村暢哉「高倉観崖の作品について—落款、印章の使用傾向を中心に」（平成22年度大分市美術館研究紀要）2011年

² 狭間久『大分県文化百年史』63頁、1969年

³ 日展史偏差委員会編『日展史12』改組編563頁、1984年

さらに、第一部（日本画）内部も一枚岩ではなかった。横山大観をはじめとする東京側の院展作家たちが積極的な参加姿勢を見せる一方、帝展京都側の竹内栖鳳は参加、不参加で揺れ動き、結局参加。これを受けて、京都の画家達も揺れ動いたのであった⁴。

このような動きから離れていた観崖も、横山大観の帝展参加に強い興味を持ったようである。帝展出品を試みるに至った心境の変化について、観崖はかつての師でもある竹内栖鳳をはじめとする帝展京都派への反発を抱きつつも「故松田文相が帝展を改革されたので⁵」「只巨人（横山）大観師一人に見て頂きやがて院展に接近したい発願の門出」としている⁶。風邪で2週間程苦しみつつも、「カルシウムや葡萄糖ホルモンの注射をして苦闘しながら」前年夏に訪れた阿蘇、くじゅうの風景をもとに構想を練り、大分市勢家の法専寺で改組第一回帝展に向けた出品作《高原》を制作（資料1）。2月7日午後以降、出品作を京都に搬送、出品手続きを行った⁷。

審査は横山大観、橋本関雪、松林桂月、前田青邨、安田靫彦、鏑木清方外が行い、1,756点の出品作から191点（人）が入選したが、観崖の作品は選外となった⁸。

また、観崖は同月東京に行き、かねてより交流のある小杉放菴に面会、帝展に出品したこと、実は院展に接近したいことなどを伝えた。また、画家宮瀬泉城を訪ねるも面会がかなわず、明治神宮、浅草観音、築地本願寺に参拝し、名古屋を経て京都の自宅で2、3日過ごし、大分に移動した⁹。自身が選外となった第1回改組帝展は4月に京都で観覧している¹⁰。

なお、帝展はその後就任した平尾鈆三郎文部大臣によって、松田改組反対派の意見をいれて再改組を試みる（「平尾再改組」）。これに反発した横山大観らは帝国美術院会員を辞任、もとより帝展（1936年秋以降文部省開催となり文展）というより横山大観への接近を期待していた観崖にとってもはや新しい文展は興味の対象外となった。

2. 3月一恩人の死一

3月15日、柞原八幡宮初卯祭参拝¹¹。昼、京都の留守宅から「チュマセンセイゴセイキョノシラセガアリマシタ」との電報を受け取る。「チュマセンセイ」とは高倉観崖の恩人中馬興丸（ちゅうまおきまる）のことである。

中馬興丸（1871-1936年）は兵庫県尼崎市の医師、政治家、実業家。興丸の妻静子の回想によれば、中馬は日露戦争従軍後、尼崎で医業の傍ら画家、柔道家など様々な人物を支

⁴ 日展史偏差委員会編『日展史12』改組編578～579頁、1984年

⁵ 松田源治文部大臣は1936年2月1日急性心臓麻痺で死去、60歳。観崖のこの発言は、松田源治は立憲民政党代議士であり、大分新聞が民政党系新聞であることを考慮に入れておく必要がある。

⁶ 「旅の折節一」『大分新聞』1936年2月13日付

⁷ 『豊州新報』1936年2月8日（朝刊）

⁸ 『大分新聞』1936年2月22日付

⁹ 「旅の折節二」『大分新聞』1936年2月28日付

¹⁰ 「旅の折節7」『大分新聞』1936年5月1日付

¹¹ 「旅の折節5」『大分新聞』1936年4月8日付

援しており、観崖もその中の一人であった¹²。観崖の回想によれば、養家（安東家）から離縁され、再び京都に行き、絵画を学んで1914（大正3）年から18年にかけて文展に4回入選を重ねる間、「少なからぬ学資と精神的教養」を与えてくれた「親にも勝る換へ難なき只一人の恩人」であった¹³。観崖は、官展を離れた後も、中馬を師と仰ぎ長く交際を続けた。

中馬死去の報を受け、直ちに関西に上り、3月16日正午過ぎ、妻と共に尼崎の中馬宅を弔問、そのまま滞在し、通夜等に出席。葬列には中馬の勲章を奉じて加わった¹⁴。

その後、一旦大分に戻るが、5月上旬、大分港から紫丸で京都に赴き、妻とともに尼崎広徳寺で催された中馬興丸の満中陰法要に参列している¹⁵。この年16回に及ぶ大分新聞の連載随筆「旅の折節」（8、14欠）の内2回は中馬興丸の回想と葬儀の様態を記している。中馬興丸のもとには他にも金島桂華や野長瀬晩花などが出入りしたが、中馬家にとって最も印象深い画家は観崖であったという¹⁶。中馬興丸の死後、1938年に刊行された追悼文集『面影』に観崖は一文を寄せたのみならず、文集本の見返し装丁も観崖によるものである。観崖と中馬興丸、中馬家との深い関係が窺える。

3. 3月～11月一京都と大分を往来、秋に大分で個展開催一

中馬死去の直前、観崖は春3月頃から大分市に帰郷しており、荏隈の医師町田貞造（郊村）翁宅に滞在して秋の個展に向けた準備を進めていた。町田は1918～22（大正7～11）年に大分市会議員を務めるなど地域の有力者であり、また俳句をともに詠む知人であった。ここで、観崖は南大分各地を散策、由布岳、鶴見岳、高崎山、九疑（疑）山（雄城台）、霊山を望み、永興石の六地藏等を見、臨濟寺の鐘の音を聞いた。また、大分県における制作としては初めての六曲屏風一双に挑んだ¹⁷。この頃制作した作品には款記に「写於豊州白雉城下郊村野荘」「写於豊州碩南郊村居」等と記される。また《山水図》（大分県立美術館蔵）もこの時期の作品である。

3月27日、春の産業市美術館絵画展覧会（3月27日～4月10日 大分市新川広場）に《夏冬山水》を出品¹⁸。

5月には一旦京都に戻り「洛西草居」を拠点に、一日鞍馬山、大悲山を訪ね、また一日は妻と長岡天神、楊谷観音、光明寺、また一日は知恩院、京極のキネマ、また一日は三尾谷、石水院、高山寺、神護寺など京都及び近郊の名所旧跡を訪ねた¹⁹。

5月下旬頃には大分に移動、再び南大分の町田郊村翁宅に滞在し、六曲屏風もう一隻を描

¹² 『面影』中馬興丸追悼文集刊行会1938年、『中馬病院百年史 中馬医療財団の歩み』2015年

¹³ 「旅の折節5」『大分新聞』1936年4月8日付

¹⁴ 「旅の折節5」『大分新聞』1936年4月8日付

¹⁵ 「旅の折節9」『大分新聞』1936年5月20日付※同記事で乗船中、「高浜着船の時南方に向かつて合掌し無き妻の奥津城を遙かに拝んだ」（原文ママ）とあり、愛媛出身の先妻がいて、既に死去していたものと思われる。

¹⁶ 中馬興丸の孫である中馬勇氏のご教示による。

¹⁷ 「旅の折節6」『大分新聞』1936年4月21日付、同新聞11月13日付

¹⁸ 後藤龍二編『大分県美術協会史料』

¹⁹ 「旅の折節10」『大分新聞』1936年5月30日付

く²⁰。この、春から夏に掛けて取り組んだ六曲屏風は《凍嶷涸汀之図》と《層壁明水之図》(大分県立美術館蔵)(図1)にあたると思われる。

7月、京都に移動、俳人の鈴鹿野風呂に誘われ、「春秋句会比叡山鳥聴きの一泊吟行」に参加、宿坊泊。翌日は日吉神社馬場先の寺で野風呂の供で「若草句会十五週年大会」に出席し、京都に帰宅²¹。7月17日、鈴鹿野風呂等とともに南禅寺近くの店で朝粥を食し、祇園祭の山鉾巡行を見る²²等、足かけ3か月程度京都で過ごした。秋の個展に向けた精力的な制作から離れていたこの間にも京都で多少画作を行っており、《高原養羊》はこれにあたる(図2)。京都滞在中の吟行や句会などは俳人としての観崖の活動の一端をうかがわせる。

9月上旬頃、秋の展覧会に向けて大分に移動、大分市勢家の是永和市氏宅に滞在。9月15日頃、大分で柞原八幡宮の浜の市参拝、花火を見る²³。9月頃由布高原、塚原温泉、由布院を訪れ、金鱗湖畔の亀の井ホテル別荘守の中谷五莢君と茶を飲み句談²⁴。この間にも11月の大分の個展準備を進めていた。

10月には一旦関西に移動し、10月21日、再興日本美術院展観覧(大阪市立美術館)、22日自由画壇展観(京都美術館)、平安神宮時代祭を見る。さらに名古屋にも足を延ばし、牡丹会十五周年俳句大会に出席した。院展の観覧は大観と院展系画家への強い関心に基づくものであろう。

その後、10月下旬頃神戸から船で大分に移動、大分市室町(現中央町)の桑原惣五郎氏(醤油醸造業、1919~22年には大分市会副議長も務めた)宅に滞在²⁵して個展への準備と関係者への挨拶回りをする。11月1日大分市表具組合第3回表装展(大分市 大分会館)に森長春堂「菊の図」等出品²⁶。

そして、11月14日、第3回更生展(個展)(11月14日~16日 大分市 大分会館)を開催した²⁷。大分会館は大分新聞の建物に併設された展示場で、1930年完成。完成後、最初に開催された新築記念書画展覧会にも観崖《月夜ノ図》が展示された場所である。

この年の大分市における制作の大半はこの個展準備のために費やされたものであった。展覧会開催を前に11月13日付大分新聞に掲載された「大分会館に於て 展観開催について」(12日取材)で²⁸、観崖は「昨年初夏の頃から帰郷致しまして時折京都にも往復しつつ精励努力して得ました結晶の作品六曲屏風二双を初めとして二曲屏風小作品等を十四日から三日間大分会館において展観御鑑賞を乞うことになりました」と述べており、先にも触れた《凍嶷涸汀之図》《層壁明水之図》や二曲屏風《山水図》はこの個展出品作である可能

20 「旅の折節 10」『大分新聞』1936年5月30日付

21 「旅の折節 12」『大分新聞』1936年7月14日付

22 「旅の折節 13」『大分新聞』1936年9月2日付

23 「旅の折節 15」『大分新聞』1936年9月30日付

24 「旅の折節 15」『大分新聞』1936年9月30日付

25 「旅の折節 16」『大分新聞』1936年11月6日付

26 『大分新聞』1936年11月2日付

27 『大分新聞』1936年11月13日付

28 『大分新聞』1936年11月13日付

性が強い。特に《層壁明水之図》は自ら「快心励作」と記しており、本展に欠かせなかったのではなかろうか。また、大分市美術館所蔵の1936年制作の2点も個展出品作とゆかりの深いものである。以下ではこの2点について紹介する。

4. 《長江春嵐・空山凍雲》(図3)

大分市美術館所蔵、高倉観崖《長江春嵐・空山凍雲》は双幅の作品。各幅の款記に「昭和丙子夏日豊州白雉城下客(遊)中洛西鳴滝絵師観崖布衣写」とあり、1936年夏に大分市の府内城下寓居で描いたものである。南大分を府内城下と見ることには違和感があるかもしれないが、観崖は《凍嶷涸汀之図》(図1)款記に「写於豊州白雉城下郊村野荘」と記しており、同年夏の滞在地は大分市荏隈の町田貞造(郊村)宅以外に見当たらないことから、本作もまた同宅において制作されたと思われる。

《長江春嵐》は墨色を基調として、近景に樹木と水面、ジャンク船のような帆船と船に乗る人物が描かれ、墨と薄緑色などで彩色された樹木が生い茂る岸边には量塊感のある陸地が広がり、その中心には小川が二筋に分かれて流れる。中景には烟霞の中にやや薄い彩色の山が見え、遠景には中景よりもやや強い墨色に覆われた山がそびえる。その左にはさらに遠くの山が薄い彩色で描かれる。墨色等で覆われた山は、樹木の葉が繁茂する春から夏の景色を表現したものであろう。本図は画面下から上へと比較的直線的に視線を誘導する構図となっている。

一方《空山凍雲》は薄茶色を基調として、手前には斜面があり、二筋に分かれた小川と数本の樹木、斜面を登る人物が描かれる。中景には山、樹木と家が数軒、さらに遠山が描かれる。画面下から上にジグザグ状に視線を誘導するように構成されている。

いずれも、観崖が1916(大正7)年の中国旅行以降、南画的画題に中国の実景を加味した作品の一つであるが、その描き方が少し変化しているところに注目したい。

1910年代から20年代半ばには、やや太め、速筆で引かれた輪郭線、塔や反りの強い屋根など中国旅行による現地取材や当時京都画壇で頭角を現していた橋本関雪との関係性がうかがえる作品を描いていたが、1929(昭和4)年に大病を患った後、1931年頃以降の山水画の輪郭線は比較的細い線が目立つようになり、さらに本図をはじめとした1936年頃以降の作品はより繊細な輪郭線が多くなる。本作は先にも触れた大分県立美術館蔵の六曲屏風大作である《層壁明水之図》《凍嶷涸汀之図》に比べれば小品ではあるが、春夏の景色を描いた《層壁明水之図》と《長江春嵐》、《凍嶷涸汀之図》と《空山凍雲》は色遣いや筆致に共通点が多く、ともに好対照をなす作品といえる。

5. 《青山白雲帖》(図4)

本作品は、《長江春嵐・空山凍雲》と同様1936年作の画帖であり、題跋に「昭和丙子秋日豊州白雉城下客次洛西観崖布衣題」と記され、1936年秋に大分市の府内城下寓居で描いたものである。秋の大分市滞在地は9月が勢家の是永和市氏宅、10月下旬から11月には室町(現中央町)の桑原惣五郎氏宅であるので、いずれかということになる。また、奥にも

制作経緯が記されており、寓居を訪ねた草本利恒と交流し「快心の作」を得ようと欲して「大意気の作品を生む」とある。

草本利恒は中上市町（現中央町）にあった草本商店の社員。後に社長、大分商工会議所会頭を務めた人物。

本作は画帖形式の作品で、題跋、奥書の他 12 図があり、それぞれ「春水遅日」「草軒春光」「水聲洗心」「軒端夕涼」「紅雲白水」「籬落秋聲」「空山凍雲」「草苑霜信」「西湖春曉」「千山踏破」「蘇郊秋聲」「野水雲曉」と題が付けられている。四季の山水、花鳥が速筆、淡彩で描かれている。「籬落秋聲」の山容は描法、彩色が《空山凍雲》および《凍嶺涸汀之図》と近く、また「千山踏破」の山容も《長江春嵐》および《層壁明水之図》に似通っており、1936年当時の観崖の表現のエッセンスが詰まった作品といえる。観崖は11月の個展開催前には、大分市の関係者に対してあいさつ回りをするなど展覧会成功に向けて積極的な動きを見せており、本作はそうした時期に、大分市で巡り合った友人との交流を示す作品である。

おわりに

高倉観崖の画風は1929年、45歳の時に大病を患い半年以上の療養を経て再び制作を始めて以降大きく変わった。1931年頃からの作品の線や款記の文字はやや弱々しいようにも見えるが、次第にそれは繊細な表現を獲得していくようになる。特に1936年以降の作品は繊細な線描と速筆を効果的に織り交ぜた作品が増えていく。観崖自身が作品或いは箱書に「快心」「会心」と記す作品もこの年辺りからみられる。まさに観崖の最充実期に差し掛かるようとする最初の一年であった。

それは本人以外も感じ取っていたと思われる。観崖の人柄は、時に激しい様子が伝えられており、後輩の日本画家溝辺有巢²⁹の回想によれば、有巢が京都市立絵画専門学校に通っていた1918～19（大正7～8）年頃には、先輩である観崖から「毒舌を聞いたり説教を聞かされたりしたものである、観崖さんほど我まま気ままな人は画家としてでなく人間としても少いだろう。何もかも自分中心で人の気持など構っておれない性分だった」、「名刀のごとくマキ割のごとく迫撃砲のような男だった」とある。それが1940（昭和15）年頃に京都で観崖に会ったときは「やがて見えた観崖さんはモンペに十徳を羽織って頭巾を被っている。胸の辺りに書きさしの古びた俳句手帳がはみだしていた。それは柔和な優しい目なざし、言葉も昔と変わった温雅さ。『先生あんたも変わったもんじゃなー。そんなに優しゅうようなれましたなー！』とつい口から出てしまった」「この頃から作風も変って温雅ないいものとなったようである」というように大きく変わっていた³⁰。1930年代半ば（昭和10年代）以降の観崖は作風と同時に人間的にも大きく変化したのであろう。

その後、1939年、『観崖画集 己卯帖』を刊行。同画集には観崖の38年前後に制作され

²⁹ 溝辺有巢（1895-1993年）大分市出身、日本画家、1965年から2年間大分県美術協会会長を務めた。

³⁰ 溝辺有巢「観崖さんの思い出」（『大分合同新聞』1957年7月30日付）

た作品が収載されており、本稿で紹介した1936年頃の中国風景を南画風に描いた作品を引き続き描くとともに、京都及び近郊の風景、歴史上の有名人物などが繊細な筆遣いと明るく平明な彩色で描かれている。箱書にも自ら「会心作」と記した作品がいくつか見られ、観崖の生涯でも最も充実した制作期にあったことがうかがえる。《花の屋より仰ぐ嵐山の夏暁》《大堰川より望む雪の愛宕》(図5)もそのような作品である。同時に、本画集収載作品には《一死報国》《皇邦稜威》《七生報国》《落照訣別》《誠忠一途》《神威降魔》《皇風遍四海》等、国威発揚を意識した作品も見られる。さらに、1941年以降は戦争状況を意識した作品が目立つようになる。《七転八起》(図6)は画題としては大正時代にも描いているものであるが、戦時中にあっては特別な意味をもった。

1945年、戦争の終結後は、新生日本の歩みに期待を示す言葉を残すとともに³¹、再び愛媛県などに長期滞在して制作し、絵画制作、句作を続けた。戦後には再び速筆の太い輪郭線を持つ作品も見られるようになる。1957(昭和32)年、滞在中の大分市北町(現大手町)個人宅で死去した。

このように、本稿では観崖の画業の画期となる1936年の動向をその随筆を読み解くことで検証し、さらに同年に制作された作品2点を紹介してその意義付けを行った。観崖は画壇に距離を置き、一人活動を続けつつも、昭和初期の日本画壇の動向を意識し、また、故郷大分市とも深い関係を持ちながら制作を続けていたのであった。

※新聞の表記等は一部現代仮名遣い、文字表記に改めた。

※本稿の作成に当たっては大分県、大分県立美術館、池田隆代氏、梶原麻奈未氏、中馬勇氏、宗像晋作氏、二宮健氏、吉田浩太郎氏をはじめとする関係の方々のご教示、ご協力をいただいた、記して感謝を申し上げます。

(大分市美術館 美術振興課 専門員)

31 高倉観崖《釣鐘図》(個人蔵)



(参考) 高倉観崖:1936 (昭和 11) 年 11 月 12 日個展開催を前に大分新聞で撮影
(「大分会館に於て 展観開催について」『大分新聞』1936 年 11 月 13 日付より)
原資料所蔵: 大分合同新聞社

(資料 1)



「高原」の大作成る

観崖氏帝展出品作品

わが郷土出身大分生ッ粹の畫家高倉で大作をものし高評譽名を轟はれ
 倉観崖氏は別府、大分の畫房を捨て、奔然京都に移り既に五年を迎へ此間斯道を研究する傍ら福博、阿蘇などの「高原」に一大ヒント
 關門を始め近江安土城址總見寺等を得て昨夏來各高原を跋渉、愈々

決意新春早々一月中旬歸分し大分市勢家法專寺の山房に於て出品の大作を製作中の處愈々完成一兩日中發送することゝなつた、七日午後山房に觀崖調伯を訪へば展覽會出品は全然私の意志に副はぬ點もあり獨立獨行を續けたが今回ほんとに久しぶり思ひ立ちました入選等は的にしてゐま

せん、それから白髪を染めた齋藤別當の意氣で進み度い今回の作品は常に私の憧憬である高原を藁題にしたもので「高原の月」とでも云ひませうか此方に来ると直ぐ風邪に見舞はれ約二週間高熱が續き病床に呻吟實に泣きたいほどの窮狀の幾日かを彷彿し此處にも藝術家の心細さを秘み、痛感しました而し幸にやつと完成致しました、何分メ切が十一日ですから特別船便で發送し大阪から京都まで借切自動車で直送の豫定です私も隨行再び歸分し大分で畫會個展を開き次いで中津、日田、竹田で小品や俳句等に勞を慰し秋頃から佐伯で會を催し今年のプランを終り來年は京都で個展を開き斯道の諸大家を招して批判を乞ふの計劃なども進めてゐます云々

因に觀崖調伯は京都美校を卒業以來研究を積み龜甲を極め大正三年頃より文展に「鴨川の春」「蜜柑」「春の遊び」「浙江所見」等を出品して入選中等學校教科書にも挿圖され、香港萬國博では金牌を受領せることもあり兩來展覽會に絶縁して二十年餘り其理想信念を如實に表現せる今回の大作は眞に迫り筆致雄渾觀者をして魅了させるものがある。寫眞は出品調。

『豊州新報』1936（昭和11）年2月8日付 原資料所蔵：大分合同新聞社

(図1)

高倉観崖《層壁明水之図》1936年 大分県立美術館蔵 (画像提供：大分県立美術館)



高倉観崖《凍凝澗汀之図》1936年 大分県立美術館蔵 (画像提供：大分県立美術館)



(図2) 高倉観崖《高原養羊》1936年 個人蔵

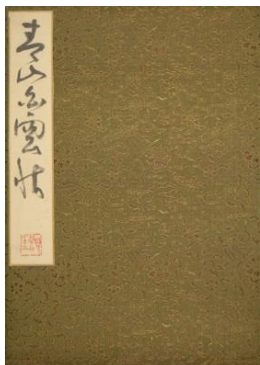


(図3) 高倉観崖《長江春嵐・空山凍雲》1936年 大分市美術館蔵

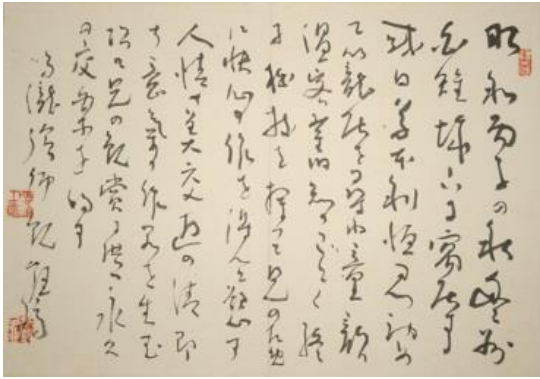


(図4)

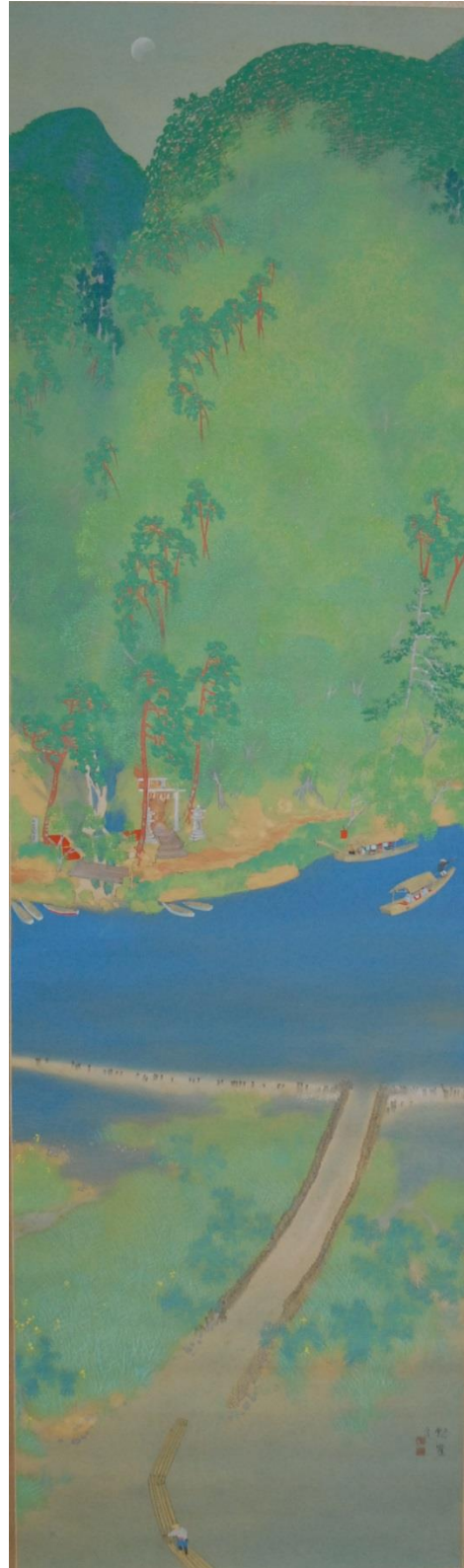
高倉観崖《青山白雲帖》1936年 大分市美術館蔵







(図5) 高倉観崖《大堰川より望む雪の愛宕》《花の屋より仰ぐ嵐山の夏暁》1936年



(図6) 高倉観崖《七転八起》1945年

